

## 論文

# 『ミドルマーチ』における女性と結婚

向井千代子

### (1)

19世紀リアリズム小説の傑作と言われるジョージ・エリオットの『ミドルマーチ』（1872）は、1832年の第一次選挙法改正前夜、すなわち1830年頃のイギリス中部の一地方都市ミドルマーチ周辺に住む人々の生活を扱った物語であり、「地方生活の研究」(A Study of Provincial Life)という副題からも暗示されるように、特定の個人を中心に描いたというよりも社会全体が主人公でもあるとも言えるような小説である。しかし、その一方において、「プレリュード」と「フィナーレ」にはさまれる形で全86章が置かれ、この「序曲」と「終曲」、特に「序曲」においては、「聖テレサ」主題というものが全体を貫く主要モチーフとして掲げられている。その「聖テレサ」主題とは何かと言えば、現代（＝ヴィクトリア朝時代）に生きる聖テレサ的な、ある理想に燃える女性たちは十分な活躍の場を与えられず、不満足なままに終る、という主題である。そして、そのテレサ主題の展開は、この小説の4つの主要プロット<sup>(1)</sup>の1つである、ドロシア・ブルック嬢の物語を中心になされるのである。

もともとこの小説は、ドロシアを中心とする物語とリドゲイトを中心とする物語を結び合わせて出来たものという成立上の事情があるために、それが作中の構造上の欠陥となっているという指摘<sup>(2)</sup>もある。またセール<sup>(3)</sup>などは、

「テレサ」主題を「女性問題」のみに限らず、社会と個人の葛藤——すなわち、「大望」を抱く個人が社会の制約の中で「大望」の成就を妨げられるという問題——にまで広げて考えることによって、「地方生活の研究」という副題と「聖テレサ」の主題との協調、一致を図っている。筆者に言わせれば、このセールの解釈は非常に作者G・エリオットに対して好意的解釈である。しかしながら、セールの論法で行くとG・エリオットは「地方社会」ひいては「社会」全体に対してかなり批判的でなければならないが、実際は「地方社会」の狭量さを描いてはいるものの、一方的に批判しているわけではなくて、個人というものの限界をも描いている。ヴァージニア・ウルフはこの作品を評して、「大人のために書かれた数少い小説の一つ」<sup>(4)</sup>と言っているが、この物語を語るG・エリオットの語り口は、まさに中庸を心得た大人の語り口で、社会と個人、主要人物とその他の人物との対立においても、なるべく客観的で中立の立場に立とうと努めている。しかし、その中立であろうとする作者の姿勢にもかかわらず、「共感」を主としたヒューマニズムの立場から語る作者の口調の背後に感じとられるのは、「社会」に対する「個人」の力の卑小さの意識、一種の無力感、そしてペシミズムである。そして、この根底に横たわるペシミズムが、『ミドルマーチ』という、英国小説の中でも傑作と言われる大作に対して多くの読者が抱かざるを得ない不満の最大の原因であると筆者は考える。

ところで『ミドルマーチ』を読む楽しみの一つは、登場人物の微細な心理分析にあるのだが、もう一つの楽しみは、地方都市における選挙演説の光景（第51章）とか、競売の光景（第60章）、鉄道敷設にまつわる農民の妨害行為（第56章）など、コミカルでジャーナリスティックな筆の冴えを見せている、いかにも1830年頃の地方都市で起りそうな事件の描写場面である。しかし残念なことに、これらの社会的事件は、主要人物の人生とは重要な関わりを持たず、単なる背景にとどまっている。つまり、『ミドルマーチ』における「社会」の描かれ方というのは近景としてではなく遠景としてであると言おうか。レイモンド・ウィリアムズは「エリオットは民衆を点景としてしか描け

なかった」<sup>(5)</sup>と述べているが、それと同じことが彼女の「社会」の描き方についても言えよう。であるから「ジョージ・エリオットの社会観は、最終的には、機械論的で決定論的である」<sup>(6)</sup>というアーノルド・ケトルの意見には筆者も賛成である。そしてケトルはこの言葉に続けて、「彼女は社会の持つ力というものを十分に意識していたが、その社会の変化についてはほとんど認識していなかった。そのために、彼女の倫理的な姿勢も、その社会観と同じ様に、静的なものにならざるを得なかった」と指摘する。この指摘は重要である。というのは、ここでケトルは『ミドルマーチ』の二つの主題、「地方生活の研究」と「聖テレサ」テーマの両主題の追究の不十分さと、G・エリオットの社会観及び倫理意識が運命論的ないし決定論的であることとの関わりを指摘しているからである。

そこで、この小論では、『ミドルマーチ』の「聖テレサ」主題すなわち「女性の問題」に焦点を絞り、ドロシア・プロットとリドゲイト・プロットの中心をなす二人の女性、ドロシアとロザモンドをG・エリオットはどのように描いているか、そしてそこに働く彼女の倫理意識はどのようなものであるかを見て行きたい。

## (2) 「聖テレサ」主題

本論に入る前に、「プレリュード」に提示されている「聖テレサ」主題について確認しておきたい。まず最初にG・エリオットは歴史上の人物であるスペインの聖テレサ(Saint Theresa, 1515-’82)の少女時代のエピソードに言及する。「テレサの情熱的で理想を求める性格は叙事詩的な人生を求めた」が、彼女の場合、「宗教的規律の改革という形で自分なりの叙事詩を見出した」と言う。しかしこの後に生れた多くのテレサ的な女性たちは自分たちにふさわしい「叙事詩的な人生」を見出せなかったと述べる。

With dim lights and tangled circumstance they tried to shape their thought and deed in noble agreement; but after all, to common eyes their struggles seemed mere inconsistency and formlessness; for these later-born Therasas were helped by no coherent social faith and order which could perform the function of knowledge for the ardently willing soul. Their ardour alternated between a vague ideal and the common yearning of womanhood ; so that the one was disapproved as extravagance, and the other condemned as a lapse. (p.25)<sup>(7)</sup>

(かすかな光明と錯綜した状況の中で彼女たちは高貴な一致を見るような思想と行為を形成しようと試みたのだが、結局のところ、通常人の目には彼女らの苦闘はただの支離滅裂、混乱としか思われなかった。というのは、これらの後世に生まれたテレサたちは、熱烈に求める魂に知識を与える役割を果たすような一貫した社会的信念や秩序によって助けられることがなかったからである。彼女らの熱情は漠然たる理想と女性としてのありふれた憧れの間を行きつ戻りつした。そして一方は行き過ぎとして非難され、他方は墮落として非難された。)

もし、ここに書かれたことがG・エリオットがこの作品で描こうと意図したことであるとしたら、それは聖テレサのような、何か偉大なことを成そうという理想を持った女性がヴィクトリア朝時代のイギリスに生まれてきたとしても、時代や社会の外的条件が十分に整っていないために挫折して終るだろうと言うことになる。だから、この作品中で聖テレサ的理想を持った女性として描かれるドロシアの人生は、初めから挫折の人生として準備されていることになる。つまり作中に描かれたドロシアの人生が高邁なる理想を求めての苦闘として描かれていれば、それはこの序章での主張通りに、自己実現をめざす女性の行手を阻む「社会」に対する批判ないし抗議として首尾一貫性を持った作品となったはずである。ところが、実際はどうだろうか。

『ミドルマーチ』の4つの主筋のうち、ドロシア・プロットは理想主義的な傾向を持った若い娘ドロシアが、父親ほども年令の違う神学者のカソーボン氏に嫁ぐが幻滅し、やがてカソーボン氏の縁者で財産のないラディスローと結ばれるという筋立てになっている。このドロシアの二人の夫との結びつきを、「漠然たる理想」(vague ideal)と「女性としてのありふれた憧れ」(common yearning of womanhood)の間を揺れ動いた結果と解釈することはできる。しかしそのドロシアの二つの選択のうち、一方の選択(カソーボンとの結婚)は誤ちであり、もう一方の選択(ラディスローとの結婚)は正しかったと取るのが普通であると思うのだが、作者エリオット自身はドロシアのラディスローとの結婚について「フィナーレ」で曖昧な態度を表明しているのである。

Many who knew her, thought it a pity that so substantive and rare a creature should have been absorbed into the life of another, and be only known in a certain circle as a wife and mother. But no one stated exactly what else that was in her power she ought rather to have done. (p.894)

(ドロシアを知っている多くの人たちは、彼女のように独立心のあるすばらしい女性が、他の人間の生活の中に埋没してしまい、ある限られた範囲内でのみ、妻としてまた母として知られているというのは残念なことだと考えた。しかし彼女の力で他にどんなことをすべきであったのかについては誰にもはっきりとは言えなかった。)

ドロシアはカソーボンの財産を捨ててラディスローと結婚する。そして「熱心な社会運動家」になったラディスローの妻としての幸せを掴んだドロシアの生き方に、作者は何故不満なのであろうか。

Certainly those determining acts of her life were not ideally

beautiful. They were the mixed result of a young and noble impulse struggling amidst the conditions of an imperfect social state, in which great feelings will often take the aspect of error, and great faith the aspect of illusion. For there is no creature whose inward being is so strong that it is not greatly determined by what lies outside it. (p.896)

(確かに、彼女の人生のあれらの決定的な行動は理想から言うとして美しいものだったとは言えない。それは不完全な社会状況の様々な条件の中で苦闘する、若く高貴な魂の混乱した結果であった、というのはこのような社会状況においては偉大な感情はしばしば誤ちの様相を呈し、大いなる信念も妄想の様相を呈するからである。そして外に存在するものによってその決定が大きく影響を受けぬほどに、内的生命の強い人間はいないのである。)

ドロシアの二度の結婚の双方を挫折と見ることによって、「プレリュード」で示された「後世に生まれた聖テレサ」のテーマは首尾一貫性を保てるだろう。だからこそ「フィナーレ」でG・エリオットはドロシアの二度目の結婚について不満をもらす人々もあったと言っているのである。しかし本文を読む限りではドロシアのラディスローとの結婚は自然の流れであり、それに不満をもらすミドルマーチの人々は、ラディスローが財産を持たぬ男であること、ドロシアに独立した資産があったためにラディスローとの結婚が可能になっただけで、二人の結婚は身分違いの結婚であるという意味で不満なのである。とすると、G・エリオットは、物語の都合上、語り手として普通一般の人々（つまり当時の読者の主流を成す中流階級の人々）におもねるような形でこのような姿勢を見せているのであろうか。

そうではなかろう。そうではなくて、やはり作者はドロシアがもっと違った生き方をできなかったことに対して残念でならないのである。しかし「フィナーレ」の最後では、ドロシアはその「歴史に名をとどめない行為」によって「世界の善の増大」に貢献したと語られる。<sup>(8)</sup>このような複雑なG・エ

リオットの語り口を我々はどう理解すれば良いのだろうか。

この複雑な語り口に筆者は作者エリオットの二重、三重の視点を感じ取る。視点というより意識といった方が良いかもしれない。女性でありながら男性名を筆名として用いたエリオットは、その語りにおいて「我々取るに足りない人々」(we insignificant people)(p.896)というように「通常一般の人々」(その代表は当然男性)の立場で語る場合と、大方の男性よりは聡明で有能な知的女性としての立場から語る場合と、G・H・ルイスとの非合法的な結婚生活を送っているために、かえって強い倫理意識を抱くようになった人間としての立場から語る場合とがある。そのためリアリズム小説の代表と言われるこの小説は、実は様々なレベルから語られた、悲劇、喜劇、道徳劇などの物語の総体から成り立っている。そしてそのように語られた総体としての『ミドルマーチ』の作品世界は、「序曲」と「終曲」で提示された作者の意図とは微妙なくい違いを見せている。そのくい違いに作者自身気付いていることは「フィナーレ」の書き方からもわかる。そのくい違いが生じた原因を探るためにも、ドロシアの二度の結婚とロザモンドの結婚生活、そしてG・エリオットの女性観について見て行きたい。

### (3) ドロシアの結婚

前述したようにドロシアは自分の結婚相手として父親ほども歳の違うカソーボン氏を選ぶのだが、その理由は偉大で崇高な生活への憧れと知識欲である。すなわち偉大な研究にたずさわる夫に献身的に尽すことを通じて、自分も無知な状態からより壮大な世界の中に己れを生かすようになりたいと考えたのである。一方カソーボン氏は結婚することによって「慰め」や安らぎを得ようと考えたのであって、ドロシアにそれほど深い愛情を寄せているわけではない。カソーボン氏は「彼の人生の残りの歳月の装飾とするために妻をめとったのであり、他の星の運行を目立って妨げることなどはしないような

小さな月にするためであった。」(p.121)

情熱的なドロシアは夫の仕事の援助をすることによって自分の知識欲も満たそうとするのに対して、カソーボン氏は妻は人生の装飾物と考え、自分の仕事に興味を持つドロシアをうるさく感じ、自分の研究の学問的価値に疑いを抱いているのではないかと、いわばスパイのような存在ではないかとまで邪推する。そのような二人の間の感情の行き違いが新婚旅行先ローマでの二人の最初の仲違いの原因となる。しかもそのローマで、二人の滞在先を訪ねてきたウィル・ラディスローの口から、カソーボンのやっている研究の不毛さ、時代遅れさをドロシアは聞いてしまうのである。それでもドロシアは夫に献身的に尽そうと努力し続けるが、一方カソーボンはラディスローとドロシアの仲を疑い、自分の死後、もしドロシアがラディスローと結婚した場合ドロシアはカソーボンの財産を相続できないという遺言補足書を書く。その一方で死期が迫っていることを感じとったカソーボンはドロシアに、自分の死後も自分の願い事を実行するという約束をしてくれと迫るが、それがカソーボン氏の不毛な研究の続行を意味すると解釈したドロシアは即答を避け、返事を先へ延ばす。そしてその返事を聞かぬままカソーボン氏は死んでしまう。

カソーボン氏との結婚生活でドロシアは何度かカソーボン氏との間に不愉快なやり取りを繰り返し、その中である意味では成長して行く。ドロシアは結婚の時点ではカソーボン氏を師と仰ぎ、彼に導かれて女性としても人間としてもより高い立場に向上して行きたいと思っている。しかしカソーボン氏との結婚生活を通じて、カソーボン氏は不毛な研究の中に閉じこもる哀れむべき存在であることを見て取って行く。愛や尊敬で始まった感情がやがて同情へと変じて行くのである。

カソーボン氏の死後、例の遺言補足書の内容を知らされた時、ドロシアのカソーボン氏に対する感情にまた新たな変化が起きる。すなわち嫌悪感を覚えるのである。



But now her judgment, instead of being controlled by duteous devotion, was made active by the imbittering discovery that in her past union there had lurked the hidden alienation of secrecy and suspicion. The living, suffering man was no longer before her to awaken her pity: there remained only the retrospect of painful subjection to a husband whose thoughts had been lower than she had believed……As for the property which was the sign of that broken tie, she would have been glad to be free from it and have nothing more than her original fortune……( pp.535-536)

(しかし今や彼女の判断力は、献身の義務感によって抑制される代りに、自分の過去の結びつきには秘密と疑惑による隠れた離反がひそんでいたという腹立たしい発見のためにかえって活発に動き出した。彼女の同情心を呼びさますような、生きて苦しみつつある男はもはや彼女の前にはいなかった。自分が信じていたよりも低級な考え方をする夫……に対する痛々しい服従の思い出が残るのみだった。そのような破れた絆のしるしである財産について言えば、そんなものは喜んでふり捨てるだろう……彼女は自分が本来持っている財産以上のものは何もいらなかった。)

ドロシアは独立した資産として年700ポンドの資産を持っており、カソーボンの財産がなくても暮して行ける。ただしカソーボンの遺言補足書によって、カソーボンの伯母の孫にあたるウィルにカソーボンの財産の一部でも渡る見込みがなくなったので残念に思う。ウィルの教育費はカソーボンが援助してやったのだが、ドロシアがウィルにもある程度の財産を譲渡すべきだとカソーボンに進言したために、かえってウィルとドロシアの仲を疑われるようなことになったのである。勿論ウィルはローマでドロシアに会って親しく話を交わして以来ドロシアに引かれているのだが、ドロシアがウィルの存在を特に意識しだすのは、皮肉なことにこのカソーボンの遺言補足書の内容を知ってからのことであった。

一方ウィルとは言えば、ドロシアが金持の未亡人になったと言うだけでも、金目当てで未亡人に近づく男と思われたくないというプライドからドロシアに近付き難くなる。まして遺言補足書の内容を知ればよけいにドロシアとの結婚は不可能に見えてくる。結婚の不可能さを知りつつプラトニックな愛情をドロシアに捧げるといふ状態にウィルは留まり、ドロシアはそのようなウィルの愛を知るだけで、それ以上のことは望まずに満足している。そのような身動きの取れぬ状態から二人を救ったのは思いもかけぬ事件が起ったためである。借金に苦しんでいたリドゲイトに銀行家のバルストロウドが金を貸したことから、バルストロウドのスキャンダルにリドゲイトも巻き込まれて苦境に陥った時、ミドルマーチではドロシアのみがリドゲイトの潔白を信じ、リドゲイトにバルストロウドから借りた金を返せるよう金を工面してやろうとするばかりでなく、親切にも妻のロザモンドにリドゲイトの潔白を説明してやろうとする。ところがそのつもりで訪れたリドゲイト家で、ロザモンドとウィルとが親しく語り合う姿を目撃してしまうのである。

ロザモンドとウィルとは恋仲であるとドロシアは誤解し、苦しむ。しかもこのショッキングな場面を目撃して初めて、ドロシアは自分がウィルを愛していたことに気づかされる。一晩中苦しんだ末にドロシアは自分のウィルへの愛の思いを諦めて、リドゲイトのためにロザモンドにもう一度会うことにする。そのようなドロシアの無私の行為に感激して、ロザモンドもドロシアに、ウィルと自分とはドロシアの思っているような関係にはなく、ウィルが愛しているのはドロシアであると告げる。そこでウィルとドロシアの結婚へと物語の結末が落ち着くのであるが、二人が結婚できる理由の最大のものはドロシアの独立した資産である。ウィルがドロシアに暇を告げて立ち去ろうとする時、ドロシアが引き留め、愛を告白すると共に自分には独立の資産があるからカソーボンの財産が無くても結婚できると告げるのである。この筋立てはいかにも不自然である。プライドの高いウィルがその説明で簡単に意を決するのもおかしいし、ドロシアが自分は贅沢はしないから年700ポンドでやっていけると説明するのも子供っぽい。ドロシアがウィルを引き留めよう

として叫ぶ言葉——「胸が張り裂けそうだわ」( My heart will break ) (p.870)はシャーロット・ブロンテの『ヴィレット』(1853)でルーシーが口にするのと同じ言葉である。つまりこのような女性からの愛の告白の場面は、ヴィクトリア朝の女性作家がよく夢想したような場面の一つであって、現実性は薄いのである。例えば、アン・ブロンテの『ワイルドフェル館の住人』(1848)やC・ブロンテの『シャーリー』(1849)でも同様に女性の方から男性に愛を告白する場面が出てくるが、『ヴィレット』の場合を除いて、どの場合も女性の方が男性よりも身分的に少し上で、財産を持っているという共通性が見られる。どうしてこのような関係に女性作家たちが魅力を感じたかという、それは多分、女性が男性よりも強い立場にあって、しかも相思相愛で結ばれる時、かえって本当の男女平等の立場に立つ夫婦関係が樹立できると彼女たちが直観的に感じ取っていたためではなかろうか。すなわち彼女たちは経済的な力関係において女性上位であることによって、社会的な男性優位の現実、フィクションという想像的世界の中で対抗しようとしたのである。

#### (4) ロザモンドの結婚

ロザモンドはミドルマーチの市長で工場主のヴィンシー氏の娘で、美人で、州の名門校であるレモン女子塾を優秀な成績で卒業した。ロザモンドが新参の開業医リドゲイトに興味を持った背景には、リドゲイトが彼女の知っているミドルマーチの青年たちよりは洗練された物腰と教養を持っていること、そしてリドゲイトの出自が自分の出自階級よりも上であるということがある。何故そのような上昇志向を抱くようになったかという、レモン女子塾での同窓の友人たちは皆ロザモンドよりも上の階級の娘たちであったからである。つまりロザモンドはリドゲイトと結婚することによって、あわよくば今の自分の階級よりは上の階級の人々と交際するようになりたいと夢見ている。一

方、リドゲイトは地方都市の開業医として地道な仕事を続けつつ、一方で学問的な研究を続けたいと思って、わざわざ地方都市にやって来たのだった。彼は金もうけや社交界には興味はなかったし、研究に専念したいためにあと5年は独身で通そうと考えていた。しかしその彼も妻を「装飾物」と考えている点ではカソーボンと同じである。

He had come to Middlemarch bent on doing many things that were not directly fitted to make his fortune or even secure him a good income. To a man under such circumstances, taking a wife is something more than a question of adornment, however highly he may rate this; and Lydgate was disposed to give it the first place among wifely functions. (pp.121-122)

(彼は財産を作るとか、いや十分な収入を保証するにも余り向かないような多くのことをしようと思ってミドルマーチにやって来たのであった。そのような状況のもとにある男にとっては、妻をめとることは、単なる装飾物以上の問題を含んでいた、たとえば彼がその装飾物としての価値にどんなに高い価値を置いていたにしても。そしてリドゲイトは妻の機能の中でも特にその装飾物としての価値を第一と考える傾向があった。)

しかし5年間は独身で過ごそうとのリドゲイトの決心もロザモンドの魅力の前には守れず、結婚する。リドゲイトには「俗っぽさ」(spots of commonness)という弱点があったからである。

Lydgate's spots of commonness lay in the complexion of his prejudices……that distinction of mind which belonged to his intellectual ardour, did not penetrate his feeling and judgment about furniture, or women, or the desirability of its being known(without his telling) that he was better born than other country surgeons.

(p.179)

（リドゲイトの俗っぽさはその偏見の様相にあったが…彼の知的熱情に付随するあの卓越した知性も彼の家具や女に対する感じ方や判断の仕方、あるいは〔自分で口に出して言わなくても〕他の地方の開業医よりは自分の方が生まれが良いことを知られたいという気持などにまで浸透することはなかったのである。）

中、上流の子女向きの教育を受けたために、上等の趣味のいい品物に囲まれ、召使を雇い、馬車もあるような生活をあたり前と思っているロザモンドと、やはり趣味のいい暮らしに慣れたリドゲイトが一緒になったのだから、たちまち借金が嵩みふくれ上がって行く。困り果てたリドゲイトが生活を切りつめるように懇願しても、ロザモンドは「私に何ができました？」と答えるばかりである。しかしロザモンドも彼女なりの努力はして、父親のところに金の無心に行ったり（断られるが）、リドゲイトの後见人であるゴドウィン・リドゲイト卿に夫に内諸で手紙を書いたりする。そのほかりドゲイトに内諸で自分たちの家を貸家に出す話を断わってしまったりする。このような勝手な行為はヴィクトリア朝の道徳から言えば、全くの悪妻の行為であり、その行為によって家計の逼迫を救えないのであるから、ロザモンドのエゴイズムが非難されるのは当然であるかもしれない。このような借金の問題をめぐっての何回かのいさかいを通して夫婦間の愛情は冷えて行く。リドゲイト卿から妻をだしに使って金の無心をするなど皮肉る返事が届き、その時初めてリドゲイトは妻の勝手な行為に気が付き、ロザモンドを非難するが、ロザモンドには何故自分が非難されねばならないのかわからない。「ロザモンドの世界には、何のともがないとみなせる人間はたった一人しかいなかった」（p.716）、それはすなわちロザモンド自身である。このようなロザモンドに対してリドゲイトはなすすべを知らない。

Lydgate had accepted his narrowed lot with sad resignation. He

had chosen this fragile creature, and had taken the burthen of her life upon his arms. He must walk as he could, carrying that burthen pitifully. (p.858)

(リドゲイトは悲しい諦念を以って己れの窮屈な運命を引き受けたのだった。彼はこのか弱い女性を選び、彼女の人生の重荷を両腕に引き受けたのだった。その重荷を憐れみながら担いつつ、できる限り歩いて行かねばならぬのだ。)

ドロシアがカソーボンを憐れんだのと丁度同じように、リドゲイトもロザモンドを憐れみつつ、重荷を負うかのようにロザモンドの人生を引き受けて行く。それは何を意味するかといえば、ロザモンドの言いなりにミドルマーチを去ってロンドンに出、医学上の研究の夢を捨てて、金持相手の医者になり、妻や子供たちに贅沢な暮しを保証してやることであった。

He wished to excuse everything in her if he could—but it was inevitable that in that excusing mood he should think of her as if she were an animal of another and feebler species. Nevertheless she had mastered him. (p.719)

(彼はできれば彼女のすべてを大目に見てやりたいと思った——しかしそんな彼女を許せる気分になるためには、あたかも彼女が別の、より虚弱な種に属する動物であるかのように考えないわけないかなかった。にもかかわらず彼女は彼を征服したのであった。)

『ミドルマーチ』を道徳的観点からのみ読めば、リドゲイトはエゴイズムの塊りであるロザモンドに負けて失意の人生を送ったということになる。しかし、もう一つ観点をずらして考えれば、リドゲイトとロザモンドの夫婦間において、ロザモンドは経済的には全くリドゲイトに依存している寄生的な存在であるにもかかわらず、リドゲイトはロザモンドに征服される。それは何故か。リドゲイトもロザモンドも全く因襲的な結婚観の中に縛られている

からである。つまり夫が妻を保護し、財政的な責任を取るのは当然であると両者共に信じている。そしてその考えは女は弱いものというリドゲイトの固定観念と通底している。いわばロザモンドは「女の弱さ」を武器に自分の思い通りを通すのである。ロザモンドは、チャールズ・ディケンズの『デイヴィッド・コッパーフィールド』（1850）のデイヴィッドの最初の妻ドーラと同じように、ヴィクトリア朝時代の中、上流階級の女性の典型である。すなわち彼女らは全く人形のように、装飾品のように創られており、経済観念もなく、金のあり余った階級に嫁ぐ妻としてしか用をなさない。

ロザモンドを徹底的なエゴイストに描くことで問題の焦点はぼかされているが、リドゲイト夫妻を描くことによってG・エリオットはヴィクトリア朝時代の、男は強い者、女は弱い者という固定観念と、男が女の生活を全面的に経済的に支えるという力関係にのっとった結婚制度の孕む矛盾というものを暴露しているのである。この矛盾はG・エリオットにはよく見えていたはずだ。何故なら、G・H・ルイスの非合法的な妻の座にあった彼女は文筆によってかなりの経済力を持ち、ルイスと共に、ルイスの法律上の妻や子供たちへの経済的援助までしていたのであるから。妻の座を利用して安楽な生活を営む優雅なロザモンド的女性たちに対して、G・エリオットが必要以上に厳しくなるのもやむを得ないことではあるまいか。

## (5) ジョージ・エリオットの女性観

『ミドルマーチ』の4つの主要プロットの一つ、メアリとフレッドとの結婚の物語では、メアリ・ガースという賢明な女性が、金持の息子で遊び人に過ぎないフレッド（ロザモンドの兄）を如何にうまくあしらって、まともな生き方をする若者に変えてゆくかという牧歌的な物語が語られる。この二人の結婚も、フレッドの方が少し階級的に上とはいえ、同等な立場にある男女の結びつきである。すなわち『ミドルマーチ』における結婚の描き方におい

て、カソーボンとドロシア及びリドゲイトとロザモンドの結婚は、ヴィクトリア朝の現実の中でよく見られた結婚であり、一方ウィルとドロシア及びフレッドとメアリとの結婚は、多分に作者エリオットの理想とする結婚の形態——すなわち、男女が平等の立場で結び付くような結婚、お互いが人生の伴侶であるような結婚である。しかしメアリとフレッドの関係においては、メアリが余りにも堅実で理想的な女性に描かれているし、ドロシアとウィルの結婚にはやはりどこかおとぎ話めいたところを感じられる。だからG・エリオットは悲劇的な結婚はリアリスティックに描くことができたが、理想的な結婚はリアルには描くことができなかったと言えよう。

リドゲイトとの結婚生活に幻滅を感じ始めた時、その重苦しい憂鬱の中でロザモンドはラディスローの訪問を心待ちにする。一方ドロシアもローウィックの邸での牢獄に閉じこめられたような生活の中で、時折ラディスローに会うと「まるで自分の閉じこめられた牢獄の壁にあいた明かり取り窓から陽光あふれる空を一瞥したかのように」(p.396)感じる。つまりラディスローは、不満足な結婚生活を送る二人の既婚女性双方を魅する存在なのである。筋立ての必要上同じ男性が使われたという解釈は成り立つが、もしカソーボンが物語の最後まで生きていたとしたらと仮定すれば、ドロシアとロザモンドの立場の共通性が見えてくる。それは当時の中、上流階級の既婚女性の生活の「魂の飢え」の状態、心の中にわだかまる熱情が何かを憧れ求め、手近にいる気楽に交際できる男性（ラディスローは芸術家風で明るい性格の男性である）との交流に慰めを見出すといった状況である。ドロシアは「ジョージ・エリオット自身の『魂の飢え』の産物である」と言ったのは、F・R・リーヴィス<sup>(9)</sup>であるが、「聖テレサ」のテーマということでG・エリオットが書こうとしたことは本当はこのような状況なのではなかろうか。「魂の飢え」は同時代の多くの女性たちが漠然と感じていたものでもあったと思う。しかし、その「熱情」は『ミドルマーチ』では十分に表現されていない。何故であろうか。

それはG・エリオット自身がこのような女性の問題について十分に明確で



整理された意識を持っていなかったからであろうと筆者は推測する。一般に作者というものは凡てに明確な意識を持って創作すると考えられているが、作品の隅々まで作者の意識が行き届いているような作品というのはそれほど面白くない。エリオットの場合、当時の倫理観に縛られた部分とそうでない部分（無意識の部分や芸術家としての現実を見る眼）とが交錯している。何かを憧れ求める行為は、個人の自己実現をめざすことであり、その行為が他人の利害とぶつかった時、エゴイズムとして非難されるだろう。リドゲイトは妻の要求を満たすために医師としての「大望」を捨てた。しかしそれはリドゲイトの人間的成長として積極的に評価されているわけではない。一方ドロシアは利己主義の考えを捨て、「世界の広大さを感じ」(p.846)、他人への同情や共感を十分に発揮できるような聖女的な女性になる。しかしドロシアの自己滅却的な生き方と、一般に考えられる「聖テレサ」的な生き方とは全く反対の生き方である。「聖テレサ」的な生き方に共感を示すエリオットが、その一方でドロシアの道徳的成長を賞賛する矛盾。そのような矛盾が生じた原因はG・エリオットの保守的な女性観にあるだろう。

I mean that as a fact of mere zoological evolution, woman seems to me to have the worse share in existence. But for that reason I would the more content that in the moral evolution we have “an art which does mend nature ”——an art which “itself is nature.” It is the function of love in the largest sense, to mitigate the harshness of all fatalities. And in the thorough recognition of that worse share, I think there is a basis for a sublimer resignation in woman and a more regenerating tenderness in man.

（動物学的進化の事実として、私には女性は男性より劣った存在であるように思えるのです。しかしまさにその理由のためにかえって一層、道徳的進化において我々女性は「自然を矯正する技術」——「自然そのものである」ような技術を持っていると主張したいのです。それはあらゆる不幸の厳しさを

和らげる、最も広い意味での愛の機能です。そしてより劣った存在であると  
の認識を徹底させることにこそ、女性のより嵩高な諦めと男性のより改良さ  
れた優しさの基礎があると思います。) <sup>110</sup>

これはG・エリオットの手紙の中の一節である。「愛」を女性の重要な機  
能と考えるエリオットには、聖テレサもドロシアも同じタイプの女性に見え  
たのかも知れない。だが女性の「より嵩高な諦め」を強調するエリオットの  
ために、エリオットの小説中の女性人物たちは苦しむを得ない。しかも  
その美德を女性特有の美德として強調することによって彼女の小説は均整を  
欠くことになる。すなわち作者エリオットは作中人物中、特に女性の作中人  
物に対して厳しいのである。『ミドルマーチ』の後半でドロシアが理想化さ  
れ聖女的になって行けば行くほど、読者にはドロシアの無知さ、未熟さが見  
えてきてしまう。純粹で愛情深くあっても、世間知らずで人を見抜く目を持  
っていなければ、本当に成熟した女性とは言えないだろう。これほどの大小  
説を書き、バルストロウドのような偽善者の心の中まで見抜けたG・エリオ  
ットが何故ドロシアを聖女扱いしてしまったのか。全く「G・エリオットは  
聖女コンプレックスを持っていた」<sup>111</sup>とでも説明しない限り、説明がつかない  
のである。そしてその「聖女コンプレックス」は、織田元子氏も指摘して  
いるようにG・H・ルイスとの同棲という当時の社会の慣習に逸脱する行為  
をしながら、しかもその社会から認められたいという願望を満足させようと  
の心理的駆け引きの中から生まれたものである。

(注)

- (1) 4つの主要プロットとは、①ドロシア・プロット ②リドゲイト・プロット ③メアリとフレッドのプロット ④バルストロウドを中心とするプロットである。
- (2) cf. Arnold Kettle, "George Eliot: Middlemarch", *An Introduction to the English Novel*, vol. 1 (Huchinson Univ & Co., 1951), pp. 178-179. 頁数表示は1961年の日本でのリプリント版による。
- (3) Jerome Thale, *The Novels of George Eliot* (Columbia Univ. Press, 1959), Ch. 6.

- (4) Virginia Woolf, "George Eliot", *The Common Reader*, First Series (Hogarth Press, 1925), p. 213.
- (5) Raymond Williams, "George Eliot", *The English Novel from Dickens to Laurence* (Hogarth Press, 1984) p. 77. First published by Chatto & Windus, 1970.
- (6) Kettle, p. 185.
- (7) George Eliot, *Middlemarch* (Penguin Books, 1970) 以下引用箇所は、引用文の後にテキストからのページ数を表示する。
- (8) Ibid. , p. 896.
- (9) F. R. Leavis, *The Great Tradition* (Penguin Books, 1962), p. 92. First published by Chatto & Windus, 1948.
- (10) Gordon S. Haight, *Selections from George Eliot's Letters*, Yale Univ. Press, 1985, pp. 331-332. (1967年5月14日, John Morley宛の手紙。)
- (11) cf. Laurence Lerner, "Dorothea and Theresa-Complex". *Middlemarch, A Casebook*, ed. Patric Swinden (Macmillan, 1972). 及び織田元子「ジョージ・エリオットの聖女コンプレックス」, 『英語青年』1984年7月号/ 織田元子『フェミニズム批評—理論化をめざして』(勤草書房, 1988), 第8章。